



Geomorphic development fo intermontane basins in Korea

著者	Chang Ho, Chin Ho
内容記述	Thesis--University of Tsukuba, D.Sc.(B), no. 373, 1987. 3. 25
発行年	1987
URL	http://hdl.handle.net/2241/5071

氏 名 (本 籍)	張 ^{ちん}	吳 ^ほ (韓国)
学 位 の 種 類	理 学 博 士	
学 位 記 番 号	博 乙 第 3 7 3 号	
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 62 年 3 月 25 日	
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 5 条第 2 項該当	
審 査 研 究 科	地球科学研究科	
学 位 論 文 題 目	Geomorphic Development of Intermontane Basins in Korea. (韓国における山間盆地の地形発達史)	
主 査	筑波大学教授	理学博士 井 口 正 男
副 査	筑波大学教授	理学博士 青 木 直 昭
副 査	筑波大学教授	理学博士 高 山 茂 美
副 査	筑波大学助教授	工学博士 砂 村 継 夫

論 文 の 要 旨

本論文は韓国の山間盆地および日本海岸の山麓地域の地形発達を解明することにより、朝鮮半島における更新世以降の地形形成環境に関する編年を試みたものである。内容は以下のように要約される。

- (1) 朝鮮半島全体の地質構造、地形構造を概観し、この半島に広く分布する花崗岩が変成岩に閉鎖的にかこまれているところで山間盆地が発達し、これら山間盆地が、基本的には、差別侵食による侵食地形であると位置づけている。
- (2) これら多数の山間盆地のうち、典型的かつ代表的な 4 つの盆地、すなわち、加祚 (Kajo) 盆地、渭川 (Wichon) 盆地、安城 (Anson) 盆地、求礼 (Kurye) 盆地について詳細な地形調査を実施して、盆地底を形成する地形面を区分した。地形面は、いずれの盆地でも正確に、沖積面を除いて 7 つに区別できることを明らかにし、各地形面の分布を確定したうえで、高位のものから順に H_1 , H_2 , M_1 , M_2 , T , L_1 , L_2 と呼んで統一した。
- (3) 地形面の形成時代について考察した。砂礫層に挟まれる泥炭を採取して測定した C^{14} 年代が約 30,000 年 B. P. であることから、 L_1 面は最終氷期の早期の形成にかかるものと判断した。花粉分析の結果も現在より寒冷期であったことを指示している。それぞれの地形面をおおう土

壤にも一定の規則性を見出すことができる。L₁, L₂面は黄褐色土壌, T面またはM₂面以高の各地形面は赤色土をのせており, これらのより高い地形面が一回以上の間氷期を経験したことを示唆している。

- (4) 地形面の形成機構について次のように考察した。求礼盆地のL₁面の一部が谷を埋めた厚い(約20m)砂礫層で構成されていることを発見し, この地形面は山麓に形成された堆積性の扇状地として発達し, L₂面はこれをわずかに侵食して発達した侵食性の扇状地であることを指摘し, 前者と後者はFilltop とFillstrath の関係にあることを明らかにした。同様な手法でM₁, H₁面がFilltop であるのに対してM₂, H₂面がそれぞれFillstrath, T面はTransitionalであることを論証した。
- (5) 上記した各地形面の発達時期を, 世界的に確認されている中期更新世以降の氷河制約性海水準変動史に位置づけるために, 日本海沿岸の江陵, 東草地域の調査を実施した。この地域では, 地形面, それをおおう土壌などが前述の山間盆地と規を一にしているが, そのほかに3段の海成段丘が発達している。この海成段丘と河成各地形面の高度関係を精査して, 両者の同時性, 前後関係を明確にした。
- (6) 江陵, 東草地域の3段の海成段丘は高位からそれぞれGünz/Mindel, Mindel/Riss, Riss/Würm 各間氷期の形成と同定され, このことを基軸として, 中期更新世以降の朝鮮半島における地形面形成, 気候変動, 海面の相対的変動などに関する編年を提出した。

審 査 の 要 旨

安定的なアジア大陸の一角を占める朝鮮半島と変動の激しい孤状列島である日本列島とで, 最近地質時代における地形発達の基本的性格の同異を明らかにすることは重要である。しかし, 朝鮮半島は安定的である, という前提に立って, 例えばDavisの侵食輪廻モデルや気候地形モデルに立脚してその地形発達を説明しようとする研究では, その結果は観念的となり, 説得力を失うことになる。従来韓国における地形研究のこのような傾向に対する反省に立って, 著者は本研究にあたり, 個々の地形形成過程を現地に即して解釈してゆく立場をとった。研究対象地域として山間盆地のほかに日本海に面する山麓緩斜地域を含めたのは卓見であり, これによって, 山間盆地における地形面発達史を世界的な海水準変動史の中に位置づけることに成功している。本論文で明確にした地形面の区分とその分布ならびに結論として提出した編年は, 韓国における地形研究に新しい観点を齎らすものであり, この成果を中心として今後の地形研究が展開されるものと評価される。

よって, 著者は理学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。